

ハンギョレ新聞 2014年3月15日(土)

【土曜版】カバーストーリー

日本の資本による支配の実情を明らかにした村井吉敬

1周年を迎え「帝国主義韓国」を考える



村井吉敬は現場でアジアの民衆と目の高さを合わせる研究者だった。写真は、エビを通じて日本とアジアの支配—従属関係を究明した彼の代表作である『エビと日本人(1988年)』の続編を書くため、2007年6月、インドネシアの伝統的なエコ技術を用いたエビの養殖場を訪れた際の様子。この養殖場は日本で民衆貿易を行うATJのインドネシア現地法人ATINAが管理している。村井は晩年、主専攻であるインドネシアを越え、韓国と恋に落ちたこともあった。「砂時計」や「ソウル1945」など、韓国現代史を描いたドラマを楽しみ、2010年5月には自身の祖父である村井吉兵衛が経営していた慶尚南道進永の「村井農場」跡を訪れ、地域の住民に「100年ぶりに来ました。村の方々に大きな被害を与え、(韓国語で)『ミアネヨ』」と語りかけた。若手研究者に対し、口ぐせのように、韓・日両国はもはや成長ではなく、アジアと共に生きる共存を選ばなければならないと強く語った。彼が亡くなって6カ月後の昨年9月に出版された追悼集『アジアを歩く—村井吉敬と仲間たち』には、村井と生涯親交のあった日本とアジアの仲間97人の調査や追悼文が掲載されている。線を引きながら、時には笑い、時には泣きながら読んだ。

東京／取材 吉倫亨記者 charisma@hani.co.kr、写真提供 内海愛子

彼は見た、エビを先立てて東南アジアを再占領した日本を



村井吉敬が2006年12月、東ジャワ州スラバヤ近くの都市、シドアルジョ地域を訪ね、現地の子どもたちと楽しく話している。インドネシアのガス開発会社であるラピンド・ブランタスはこの地域で強引な採掘作業を行い、周辺にある火山を刺激し、大量の泥が噴出する事故を起こしたことがある。この事故により、シドアルジョ近隣の13の村が泥に埋まり、3万人が被災した。内海愛子提供

【土曜版】カバーストーリー 村井吉敬とアジア

私たちにとってアジアとは何だろう。韓国経済のために安価な労働力を提供し、サムスンのスマートフォン、ヒュンダイ自動車、LGのPDPを輸入し、韓国の公害産業を快く受け入れる顔のない他者ではなかっただろうか。かつての植民地支配の痛みを、血を吐くほど強く語る韓国人は、いつの間にか日本より容赦のない侵略者になってしまった。エビを通じてアジアと日本の支配-従属関係を明らかにした村井吉敬(1943~2013年)は、韓国人に対し、いまこの場に立ち止まって自分の姿を振り返りなさいと語りかける。

バナナはいつから安くなった？

30代後半以上であれば、誰でも覚えている事実だろうが、一時、韓国人にとってバナナは誕生日でなければさわることのできない高級な果物だった。1977年4月21日付「毎日経済(韓国紙)」に掲載された春の果物相場を見ると、16本のバナナ一房の価格はなんと5500ウォン(1本当たり343ウォン)であったことが確認できる。当時、ジャージャー麺1杯が200ウォンだったので、バナナ1本がジャージャー麺より高価だった計算になる。1980年代中ば以降、東南アジアのバナナに対する輸入規制が緩和したことで価格が急落し一般化した。韓国社会の視線は相変わらずバナナの向こうにあるフィリピンの民衆の暮らしにまで及んではない。

梁川七星、いや「梁七星」を見つける

韓国企業の東南アジア進出が増加し、韓国社会の自省が求められる不幸な事件が相次いでいる。去る1月3日、カンボジアに進出したアパレルメーカーのヤクチン通商で働く労働者が低賃金の改善を訴え起こしたデモ隊に軍が発砲し5人が死亡した。それから6日後の9日、バングラデシュで韓国企業のヨンウォン貿易の手当削減に抵抗していた女性労働者が、警察が発砲した実弾に当たり死亡、同日の夜中にはベトナムのサムスン電子建設現場で現地の労働者に対する警備員の暴力が労働者の集団抵抗を呼んだ。他者との関係で自らを「被害者」として位置付けることに慣れてきた韓国人に対し、アジアの隣人はいつからか「加害者韓国」と呼んでいる。韓国とアジアの関係はこのままでいいのだろうか。

恵泉女学園大学の李泳采教授(国際社会学)は「最近のような状況で韓国は、アジアの民衆の連帯を大切に考えていた村井吉敬のアジア学を学ぶ必要がある」と語る。韓国人にはあまり知られていない村井吉敬(1943~2013)は、歩き、尋ね、体験するスタイルで東南アジアの民衆の暮らしを研究し、日本の東南アジア研究の地平線を広げたと評価される人物。23日はすい臓がんで亡くなった彼の1周年忌だ。

韓国では村井よりも彼の生涯の伴侶であった朝鮮人BC級戦犯の研究者である内海愛子(72)大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター所長のほうがよく知られている。村井と内海は1975年11月、インドネシア留学当時、朝鮮人捕虜監視員として戦争に動員されていた梁七星(1919~1949)という人物を発掘したことで有名だ。朝鮮人軍属だった梁七星は、解放後も現地に残りインドネシア武装独立闘争に志願したが、オランダ軍に捕まり銃殺され、インドネシア独立の英雄として奉られている。村井夫妻が日本人「梁川七星」が実は梁七星という事実を把握し遺族を捜し出す過程は、李明博政権のころ民間人査察で被害にあったキム・ジョンイク氏が翻訳した『赤道に眠る(2012年)』に詳しく紹介されている。

村井のアジア学の特徴は何だろうか。彼は現象を巨大な理論的枠組ではなく、エビやコーヒー、チョコレートといった平凡なモノを通じて分析し、日本とアジア諸国の関係の本質を抽出するのに成功した。彼は代表作『エビと日本人(1988年)』で、次のように問いかける。

「バナナとエビは特に関係がない食品だ。でも、日本人消費者の立場から見ると、この二つは妙に似ているふしがある。1950年代に生まれた日本人にとって、バナナもエビも高級食品というイ

メージが強い。(略) なぜ(日本人は) エビをこんなにたくさん食べられるようになったのだろうか。エビはいったいどこから輸入されたのだろうか。エビを捕った人はどんな人なのだろうか。日本にエビを売ることによって、輸出する側にはどんなことが起きているのだろうか。」

村井の東南アジア研究が始まった1970年代中ごろは、日本が経済力を先立て東南アジアを席卷していった時期と重なる。太平洋戦争のころ、日本の侵略は銃剣を先立てたものだったが、戦後の侵略は資本を先立て多方面にかけて行われた。その中のひとつがエビだった。1960年には625トンにすぎなかった日本のエビの輸入量は、26年後の1986年には実に21万トンで世界1位を記録する。日本のエビ需要を支えるためにインドネシアの多くの海岸と森林は荒れ果て、住民はエビ加工農場の低賃金労働者として雇用された。侵略の手段が、銃剣から資本に変わっただけで、日本と東南アジアとの間の支配-従属関係は変わらなかった。

日本で1960年625トンだった
エビの輸入量は1986年21万トンに
大幅に増え世界1位を記録した
「なぜエビをたくさん食べられるようになったのか」
村井はエビを追いかけた

日本企業に利益を落とし
現地の住民には被害だけをもたらした
ODAの真実も知らせた
彼は日本の外務省がもつとも
負担に思う人物であった

なぜ公正貿易ではなく、民衆貿易なのか

これに対する村井の答えは、アジアの民衆が商品取引を通じて連帯する「民衆貿易」だった。これまで25年間、日本で民衆貿易を地道に進めてきたオルタートレードジャパン(ATJ)の津留歴子インドネシア現地経営責任者は「民衆貿易というのは、ただ単に良い食べ物を市中価格より、少し高めに購入するという意味ではない」と語る。オルタートレードジャパンが輸入した民衆貿易商品を販売するアプラ(APLA: Alternative People's Linkage in Asia)が作成した東チモール産コーヒーのパフレットを見てみよう。1ページ目を開くと、製品の写真や値段の代わりに、東チモールの地図と、この国の政治経済情勢についての説明が続く。東チモールの面積は1万4600km²で、日本の岩手県とほぼ同じで、通貨はドル、主な輸出品はポルトガルが持ち込んだコーヒーという事実が説明されている。現地の情勢を説明する長い文章の最後に彼らが下した結論は、「(新生国家である)東チモール人たちの自立を支援するため、日本人が彼らの唯一の収入源であるコーヒーを買わなければならない」というのだ。日本人のために、安くて良いコーヒーを消費するためにコーヒーを輸入するのではなく、日本の民衆がコーヒーを通して、東チモールの民衆の自立を手助けしなければならないと主張しているのだ。経営責任者の津留さんは「日本の市民がもつ、か

つての戦争と戦後の経済搾取に対する引け目が民衆貿易のような独特な関係づくりを可能にさせた」と述べ、「そのような意味で私たちは(西欧で用いられる)公正貿易という用語よりも、民衆貿易という用語のほうを好んで使っている」と述べた。

日本で民衆貿易が初めて始まったのは、1980年代の中ごろまでさかのぼる。フィリピンのサトウキビ産地であるネグロス島で発生した飢餓が直接のきっかけであった。1985年、世界の砂糖価格が1ポンド当たり18セントから3分の1の6セントに暴落すると、農場主たちは採算が合わないという理由でサトウキビ生産を中断した。ネグロスには、全耕作地の70%を上位3.5%の地主が独占するなど、土地の分配において大きな問題を抱えていた。

サトウキビの生産が中断になり、大黒柱が仕事を失うと、間もなく島を大規模な飢餓が襲った。当時、日本では生活協同組合(COOP)運動が元気よくスタートしていた。現場で、ネグロスの惨状を直接見て感じた九州の生活協同組合の関係者らが募金運動を開始した。しかし、大切なことは現地の人々の自立だった。彼らは現地調査で「皆さんが売ることのできるものは何か」と尋ねた。ネグロスの住民たちは、サトウキビは農場主のものなので売れないが、家の裏山に生えているバナナなら売ることができると答えた。甘みが少し足りず、現地ではさほど人気がない「バラゴンバナナ(バナナの一品种)」だ。

日本の生協関係者らはこのバナナを日本に輸入することで意見を一致させた。農産物の輸入の経験がない初心者が始めたことだったので、試行錯誤が続いた。苦労の末、1989年4月、神戸港に到着した10トンのバナナは茎が黒く変色し、皮も柔らかくなっていたが、幸いにも果肉は大丈夫だった。農薬の助けを借りず高地で自然が育てた野生のバナナは生協で大ヒットになった。この成功に鼓舞した彼らは1989年10月、ATJを設立し、これまで民衆貿易を続けている。村井は亡くなるまで、ATJと傘下の民衆貿易部門APLAの運営委員を務め、インドネシアで300年続いた伝統技法でエビの養殖をおこなってきた生産者を探し出し、1992年「エコシュリンプ」の商品化に寄与したりもした。現在ATJはバナナ、砂糖、オリーブオイル、エビ、チョコレートなど、さまざまな製品を、民衆貿易を通じて日本の消費者に届けている。

植民地時代の「村井財閥」 孫の反省

村井がアジアの民衆の暮らしに関心をもつことになった背景には、個人史に関連するところが大きい。村井の祖父は、明治時代、たばこの販売を通じて大金を稼いだ吉兵衛(1864~1926)という人物。吉兵衛にはたばこ商売で稼いだ金で村井財閥を成し、北海道、台湾、朝鮮などに大農場、鉱山事業を展開する。植民地時期には、慶尚南道金海市進永付近に、二つの村を合わせた大きさの大規模な村井農園を経営したりもした。現在この場所にある注南貯水池も村井農場で開発したものだとされている。彼の先祖が展開した植民地支配に対する反省が彼をアジアの民衆の暮らしに導いたことになる。内海所長も「(かつての歴史に対する反発のせいなのか)村井は平凡な民衆が好きで、権力をとても嫌がった」と言う。

村井が関心を寄せたもう一つのテーマは、日本政府が東南アジアで進めている公的開発援助(ODA)だった。米軍政期(1945~1952)を終えた日本は、アジアに復帰するため、戦争で被害を与えた国々に対する賠償と、その延長線上にある公的開発援助を進めた。しかし、戦後賠償と公的開発援助資金は日本企業が現地に進出して発電所、ダム、道路などを作る形で進められ、

日本の企業に莫大な利益をもたらした半面、現地の人々にはむしろ被害を与えた。彼はニューギニア島とオーストラリアの間に位置するアラフラ海の小さな島でインドネシア領のババル島で日本軍が700人以上にのぼる民間人を虐殺した事件に言及し、日本がインドネシアに803億円を賠償したが、実際に被害を受けた平凡な民衆に対する恩恵はないと指摘した。それだけではなく、援助による大規模な土木工事によって、多くの人々がふるさとを離れなければならなかった。彼はまた事業の過程で、日本の政治家と東南アジアの軍事政権の間で起きた不正疑惑を指摘し、「軍事政権と独裁政権が借りた債務をなぜ平凡な民衆が負わなければならないのか(『検証 日本のODA』)」と日本政府に対し、直撃弾を浴びせた。内海所長は「そのせいで村井は日本の外務省から一番負担に思われ、避けたい人物になった」と言う。

村井が亡くなる前、病院で残した最後の著書はインドネシア領パプア住民の暮らしを記録した『パプア—森と海とひとびと』だった。パプアは太平洋戦争時、日本軍と連合軍が激しい戦闘を行った場所であるため、いまでも島のあちらこちらで日本兵の遺骨が発掘されている。村井のパプア取材に同行した津留氏は、「家族の遺骨を探しに多くの日本人が現地を訪れたが、現地の人々が受けた被害にまで関心をもつ者はいなかった。現地の人々の痛みに寄り添いながら言葉をかけた日本人は村井が初めてだった」と言う。彼は亡くなる前、イワシについてのあらたな研究を進めていた。慶尚南道統営の在来市場で商人が教えてくれた10種類上のイワシの名前を喜んですべて書き記し、亡くなる直前に見舞いに来た韓国の若手研究者に「ニムのための行進曲」を歌ってほしいと頼んだ。

韓国人は、エビとバナナとヤクチン通商の衣類とヨンウォン貿易の靴の向こうに、憂いに沈むアジアの人々の生の顔と向き合う用意ができているだろうか。村井は、金もうけに血眼になってアジアで私たちがどんなことをしでかしているのか、ほとんど自覚できないでいる韓国では、なかなか見ることのできない実践的知識人であり、本当のアジア人だった。

東京／吉倫亨特派員 charisma@hani.co.kr

「ニムのための行進曲」を共に歌った1週間後、天に…



故村井吉敬元早稲田教授は『エビと日本人』『スンダ生活誌』など、数多くの本を残した。しかし、韓国語で出版されたものは妻の内海愛子大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター所長との共著、『赤道に眠る』だけ。去る4日、ソウル鍾路区齊洞の路地裏で、内海所長(左前)と李泳采恵泉女学園大学教授(右前)が、村井教授の本を持ってカメラの前に立っている。一緒に対談した韓洪九聖公会大学教授(左)、徐ヘソン作家も二人の後ろで笑っている。キム・ソングァン記者 flysg2@hani.co.kr

【土曜版】カバーストーリー 村井吉敬を語る

対談の場所をソウル鍾路区齊洞の「カフェ コ」にしたのには理由がある。2011年の夏、韓国を訪れた村井吉敬、当時早稲田大学教授、内海愛子大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター所長、李泳采恵泉女学園大学教授と、韓洪九聖公会大学教授、徐ヘソン作家が、まさにこの場所で会ったからである。去る4日、午後の遅い時間帯に日本からソウルに到着したばかりの内海所長と李泳采教授を、韓洪九教授、徐ヘソン作家が喜んで迎えた。昨年、世を去った村井教授はこの場を共にすることはできなかったが、4人の対話の中で、彼の4つの光に会うことができた。



韓洪九聖公会大学教授

「かつての大東亜共栄圏とは異なり
下からアジアがどうやって
会えるのかに取り組んだアジア人」



李泳采恵泉女学園大学教授

「近代化された日本はアジアを下に見ていたが
歩き、見て、尋ねるスタイルを通じて
アジア人の豊かさに気付いた」

アメリカが嫌いだった安保闘争・全共闘世代

李泳采 村井先生が亡くなってほぼ1年になります。

徐ヘソン 2年半前の夏に、この部屋で村井、内海先生ほか何人かでエビやイカの話をしましたね。おかげで、その日は北村にエビの群れ、イカの群れが押し寄せました。

韓洪九 次回はイワシの話をしようということでしたが、イワシの代わりに村井先生の話をするようになりました。先生が危篤だと聞き、私と徐ヘソンが東京の隣の千葉県にあるお宅を訪ねま

した。韓国の読者のために、村井先生が取り組んでいたアジアの概念から紐解いていきましょう。先生は日帝の大東亜共栄圏とは異なり、下からアジアがどうやったら会えるのかについて、先駆的に取り組んだアジア人でした。日本の良心的な知識人で、近隣の国を侵略した日本がどうやってアジアと再び会えるのかについて、もっとも真摯な取り組みをされた方です。妻の内海愛子先生は、研究をたくさんされていますが、インドネシアの独立英雄になった朝鮮人捕虜監視員だった梁七星のような韓国ではまったく知られていなかった人物を発掘し、韓国現代史の領域を広めた方だといえます。

李泳采 村井先生と内海先生は、どうしてアジアに関心を持つことになったんですか？

内海愛子 村井や私は、アメリカの占領下で育った世代です。私たちはアメリカが嫌いだったんです。村井のそもそもの専攻はマックス・ウェーバーで、宗教と社会問題に関心がありました。イスラム国家であるインドネシアの社会と宗教に関心がありました。村井がインドネシアのスダに1975年から2年間留学することになったのですが、その時、同行しました。留学生活を通じて、大学で学んだ理論が合わないということに気づき、これを全部捨てました。先入観を捨てて現地を歩きながら、そこに暮らす漁民や普通の人々の声を聞いて、研究をやり直したんです。それで、留学はしたものの、大学にはほとんど行きませんでした。毎日歩き、チョウを捕まえるのが好きで、昆虫を捕まえに行っていました。

韓洪九 村井先生がそんな作業をされたという話を聞いたとき、「現場に行って調査して、その土地を踏んでいなければ話もするな」と言った毛沢東の言葉が思い浮かびました。

李泳采 当時の生活が描かれている『スダ生活誌(1978年)』は、日本で大きな反響を呼びます。アジアは遅れた地域だと考えていた人々に、アジア人たちの暮らしの中にどれだけ豊かさがあるのか示したんですね。また、アメリカ式の研究の枠にとらわれずに書いた、旅行報告書といえるスタイルが衝撃を与えました。

内海 村井を通じて、日本社会はアジアについて何も知らないんだということがわかりました。日本企業が海外進出を始めたのは1965年です。留学後に共同作業をしたことのうちのひとつが、日本の多国籍企業のインドネシア進出の現状でした。1980年代、観光客が増える前に企業がまず進出したんです。

韓洪九 韓国ではこのような作業が1997~98年ごろに始まりました。内海先生や村井先生世代は、アメリカ占領下で教育を受け、安保闘争(日米相互防衛条約改定反対運動)と全共闘(全学共闘会議、60年代の日本の学生運動)を経て留学に行くんですね。普通だったら、もっと大きなもの、構造的なものに関心がいきそうなものですが、なぜエビのような問題に関心を持つことになったのでしょうか？ 内海先生も韓国史の大きな流れから見ると、かなりかけ離れた朝鮮人BC級戦犯問題を研究してこられたのですが。

内海 私は英語の教師をしていたのですが、「ドキュメンタリー朝鮮人(日本読書新聞出版部、1965年)を読んで、歴史的背景を少し知っていたんです。日本人は朝鮮が植民地だったということを言葉では知っていましたが、その実態が何だったのか、当時はよく知りませんでした。教師を辞め、在日女性についてのヒアリングをしていたら、日本に朝鮮人戦犯が存在することを知ることになったんです。当時、戦犯は戦争犯罪者と思い、深く研究するつもりはなかったのですが。

村井は「村井財閥」という新興財閥の家系で生まれました。次男だったので財閥家の構造が少し息苦しかったようです。



2011年の夏のように、ソウル鍾路区齊洞「カフェ コ」にて。(左から) 徐ヘソン作家、韓洪九教授、内海所長、李泳采教授。
キム・ソングァン記者

インドネシアで見た韓国は帝国主義国家

李泳采 そのとき、インドネシアの独立英雄である朝鮮人の梁七星を発見することになるんですね？

内海 村井はたまに日本に関連する行事の通訳を頼まれることがありました。1975年11月、日本兵3名がインドネシアの独立英雄に推戴されます。ほかの2名の日本人は家族が行事に参列し、遺骨は日本に送還されました。そのときに残った1名、梁川七星（梁七星）が朝鮮人だという話を聞きました。村井と一緒に、梁七星が所属していたゲリラ部隊員にインタビューし、捕虜監視員として来ていた朝鮮青年の実態がわかります。そのなかの148人は戦犯になります。これを通じて 日本の戦後処理問題がどういったものなのか、赤裸々に知ることができました。

徐ヘソン その内容を記録した『赤道に眠る(原題『赤道下の朝鮮人叛乱』1980年)を読んだおかげで、香料諸島と呼ばれるマルク諸島のアンボン飛行場に降り立ったとき、感慨深かったです。朝鮮人捕虜管理員が連合軍捕虜に建設させた飛行場ですね。映画『戦場にかける橋』(連合軍捕虜を動員した泰緬鉄道建設を扱った作品)を見たとき、悪い日本の奴らと思いながら見たのですが、強要によるものでしたが、その朝鮮人の子孫として、重畳した矛盾に息が詰まる思いでした。『スダ生活誌』などを読むと、その地域で直接暮らしながら獲得した記録、外部の視点ではなく、現地の人々の視点で世の中をながめる視点が新鮮でした。たいがい「ナショナル・ジオグラフィック」のような「文明化」された視線で、第三世界を対象化して再構成することが多いのですが。これは新しいアジア学に対する指針だと言えます。

内海 『小さな民からの発想(1982年)』は、『スダ生活誌』の次に村井が書いた著書です。国内総生産(GDP)などの数字で表す豊かさではなく、生活のなかの豊かさを現したものです。その後、ベトナム反戦運動を行っていた小田実、鶴見良行らが、もっとアジアを知ろうと作ったのがアジア太平洋資料センター(PARC)です。村井と私はそこで多国籍企業研究を行いました。馬山輸出自由地域に対する日本企業研究もPARCが行いました。私と村井はインドネシアに進出した日本企業の実態を調査しました。村井の師匠といえる鶴見良行は『バナナと日本人(1983年)』を書きました。そのころ、日本でエビが急にたくさん見ら

れるようになります。エビの値段が下がったんですね。それで、エビを調査し『エビと日本人(1988年)』を発表しました。

徐ヘソン 村井先生は政治的背景があるテーマを、むしろ非政治的に紐解いていきました。初めてお会いしたとき、すぐにエビとイカについて話しはじめました。エビとイカ、アジア植民地などに関する問題を5、6時間もの間、話し合いました。今日、私たちの食卓に上っているエビは、日本の山口県で初めて開発されました。これがアジアの海岸線へと進出します。驚くことに、これはほぼ大東亜戦争時の日帝の侵略地と似ています。かつて日本軍が進駐した旧植民地に、いまはエビが駐屯しているといえます。当然、このエビは、日本をはじめとする「先進国」へ輸出されます。この東アジアのエビ養殖場は、満潮と干潮が合わさる地帯で群落をなしている、つまり棲息条件が一致するマングローブ林を破壊して、長い海岸線を変えてしまいます。生体汚染はもちろん、津波が押し寄せたとき、これは深刻な被害をもたらしました。このように、具体的なアプローチを通じて、アジアの問題、隠されている政治性、つまり帝国主義的影響力について現時点で取り組んでいるということです。短く言えば、村井先生は、東アジアの海岸線を守った人だと言えます。自然的にも、政治的にも。

内海 日本の多国籍企業について調査するのは容易ではありません。それで、彼らが生産しているモノを通じて調査をしなければなりません。調査の仕方は、バナナやエビと同じです。その中に植民地が見え、新しい形の帝国主義が見えました。

韓洪九 韓国ではまだそれほどの市民運動にまで至っていないと思います。それは、ある面で帝国主義の経験がないからでもあります。韓国でも企業を対象に市民運動を行う国際民主連帯のような団体があります。国際民主連帯のベトナム運動パートが独立して平和博物館になりました。まだ韓国の労働統制方式でインドネシア、フィリピン、ベトナム、カンボジアの労働者を相手に統制を加え、労働問題が発生したら調べ、発表するレベルにとどまっているようです。

内海 常に進出される地域から問題がよく見えます。インドネシアから見れば、韓国は完全な帝国主義国家です。インドネシアのジャカルタに5万人ほどの韓国人がいます。



徐ヘソン作家

「日本は悪い奴だと思っていたが
朝鮮人捕虜管理員を見ると

重畳した矛盾に息が詰まった」



内海愛子 大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター所長

「被害者であり加害者になった韓国が
アジアでどのような位置にいるのか
韓国人も考えるときがきた」

アジア人の歌、ニムのための行進曲

徐ヘソン 一言添えると、日本の農業や海の養殖技術は世界的です。植民地経営は育種学的発展を伴いました。技術支配とともに、集約的生産性を高めるためのものです。エビの養殖技術は台湾、韓国、東アジアへと輸出されます。植民地支配の順番と類似する並びだということは、誰もがわかります。技術の発展を無視しようというのではなく、その政治的背景を探り、解明することがアジア学の出発点だといえます。

李泳采 村井先生は現地の住民の生活スタイルが持続できる方法は何なのかについて、取り組んできました。それで、インドネシア現地の伝統漁業方式で生産したエビ(エコシュリンプ)を民衆貿易の形で輸入しています。

徐ヘソン 家具と言えば、韓国人が思い浮かべるのはボルネオですね。大東亜戦争はこの場所から出る石油を日本に持っていくためのものでもあったのですが、これが米軍によって断たれ、戦争の勢力図が変化します。戦後は木を切り出しました。韓国人がそれに続きました。最近、その地域でもっとも大きな露天掘炭鉱を開発しています。現場に行ってみましたが、ボルネオとカリマンタンで原始林はほとんど見つけることができませんでした。ここに来て、バイオオイルが問題です。パームオイルの実なるアブラヤシを植えるために、広範囲な森林で日常的に放火が起きています。これは「先進国」のバイオ的思考もたらしている事態であることを、よく知っておく必要があります。

李泳采 村井先生を通じて、戦後の日本がアジアとどう向き合ってきたかがわかります。近代化した日本はアジアを下に見ていましたが、アジアの庶民の暮らしの中に豊かさがあるということを知ることになります。村井先生は歩き、見て、尋ねる研究スタイルを通じて、あらたな道を拓きました。

内海 村井はインドネシアに行って、生活と価値観が変わりました。あまりしゃべらず、内向きだったのですが、インドネシア人と会ったことで、解放された感があったようです。彼は既存の学問体系を踏襲するのではなく、彼らと暮らしが持続するような研究をしたがっていました。一生懸命働いているのに、貧しい生活をしている構造に疑問をいだき、これを変えたかったです。韓国に来て有名な人に会うより、道端で会う韓国人が一番好きだと言っていました。加えて、韓日関係だけ考えれば韓国は被害者だけれども、韓国企業と軍隊がアジアに進出して加害者になったりもします。韓国がアジアでどのような位置にいるのか、韓国人は考える時が来ました。差別はいつも重層的なので、この人は加害者、あの人は被害者という単純な構造はありません。

韓洪九 短い対談を通じて、韓国の読者が村井先生をどれだけ理解できたか心配な点もありますが、少し離れた所からお目にかかったところ、立派な人生を歩まれたと感じました。

李泳采 個人的に、日本で内海、村井先生にお会いしたことが人生の転換点でした。世界化と新自由主義をどう克服するのか、村井先生は具体的に提示しました。亡くなる1週間前に訪ねたとき、ぜひ聞きたい歌があると言ったんですね。一緒に歌ったのですが、この時、涙を流されました。泣いていらっしゃる姿を初めて見ました。「ニムのための行進曲」でした。

徐ヘソン 一緒に歌う歌があるということは、一緒に泣く理由があるということですね。一緒に計画しなければならぬ未来もあるという意味ですね。これがアジア人の歌なんです。

キム・ミンギョン記者 salmat@hani.co.kr



>>> 무라이 요시노리 연보

1943년 8월	지바 출생/조부는 메이지시대 신재벌 기치베에, 부친은 와세다대학 총장을 지낸 스케나가
1962년 6월	와세다대 제1정치경제학부 졸업
1975~1977년	인도네시아 유학/ 인도네시아 독립영웅 조선인 양철성 발굴
1979년 4월	조치대 교수(~2008년 3월)
1980년	부인 우쓰미 아이코와 <적도에 묻히다>(원제 <적도하 조선인 반란>) 공저
1988년	<새우와 일본인> 출간
1991년	인도네시아 전통기법으로 양식한 새우 일본에 소개. 이후 '에코 슈림프'로 상품화
1992년	<검증 일본의 ODA> 출간
1999년	<수하르트 가문의 축재> 출간
2005년	일본평화학회 회장(~2007년 2월)
2007년	<글로벌화와 우리들> 출간
2008년 4월	와세다대 교수(~2013년 3월)
2013년 3월23일	사망

※아시아태평양자료센터(PARC), 아시아인권기금, 민중무역담당 비영리법인 아플라(APLA) 공동대표 등 역임